

は dumbbell-type のものを経験したので、診断上の問題点を含め報告する。症例は40歳の女性で、集検で胃の異常を指摘され来院。内視鏡で前庭部小彎後壁に2~3cm大の胃内型粘膜下腫瘍を認め、透視圧迫像でφ3cmの腫瘍を認めた。核出術目的で開腹したところ、漿膜側に7×5×3cmの西洋梨様腫瘍を認め胃前庭部切除術を施行した。組織学的に胃壁内・壁外性の leiomyoma であった。

64. The Johns Hopkins 大学外科の現況と Reperfusion Injury について

小林 進 (千大)

Mark G. Clemens

(The Johns Hopkins 大学小児外科)

The Johns Hopkins 大学病院での1987における年間手術件数は25,540うち全麻15,292であった。また、消化器外科、腫瘍外科、移植(心肺肝腎)手術件数は、それぞれ1233, 1098, 81例であった。また Reperfusion Injury は、阻血臓器の障害機序の新しい概念として受け入れられつつあるがその発生病因として、活性酸素、細胞内 Ca の蓄積などが考えられてきたが、肝においては Kupffer 細胞より放出されるさまざまな chemical mediator が重要であることが示された。

65. 超音波ネブライザー—細菌汚染の追求とその管理方法について—

清水 悟枝, 高橋敏江, 篠田康美
木崎あゆみ, 田村道子, 内貴恵子
倉山富久子 (千大4F勤務室)

当科の超音波ネブライザーは細菌汚染が著明であることが伴氏より報告された。そのためネブライザーの管理方法について検討した。消毒方法を変更し、諸条件下での実験で、患者由来と思われる汚染がマウスピースから蛇管①で留まっていることがわかった。このことより、これらの部分を個人専用とし、1日1回消毒したものと交換することで、感染予防となることがわかった。患者指導と合わせて、取扱い上の注意をまとめた。

66. 欧米における Informed Consent の現況

井上智子 (千大・看護学部)

Informed Consent の現況と今後の方向性を知らため、INDEX MEDICUS (73~88年)に掲載された1531文献の内容分類を行った。結果は、I患者に関するもの(精神疾患患者、小児、被験者等)30.7%、II医療行為に関するもの(手術、検査、治療方法等)27.9%、III

法律・倫理等に関するもの25.3%、IVその他16.1%であった。今後は、わが国の医療のどの領域にこの考え方を取り入れて行くかが課題である。

67. 国際健康教育ユニオンについて

山下泰徳 (千大・教育学部)

WHO の諮問機関として1951年よりパリに本部を置いて組織され、日本は北西太平洋地区に属し、その本部はソウルにある。日本もこの方面で国内的にも国際的にも力を注ぐ必要がある。演者は1988年の総会に出席して、学童の随時個別検尿の必要性を発言し、また1989年夏このユニオンの理事会が東京で開かれたのを機に、世界各地の理事36名を千葉に迎え、千葉分科会コーディネーターとして、県、市、大学および一般有志との会議を運営した。

68. 千葉県医師会開放型病院アンケート調査より

佐藤裕俊(船橋市立医療センター)

千葉県医師会では開放型病院検討特別委員会をもうけアンケート調査を行った。県内の開放型病院を持たない20地区医師会に調査を依頼し15医師会(75%)から解答を得た。貴地区で開放型病院が必要かとの間に8地区が必要と答えたにすぎなかった。必要理由として他の医師との交流が深められる、新しい医療技術や知識が得られる、継続診療ができるなどである。利用されない理由として病院に行く時間がない、病院スタッフと人間関係がうまくいかない、責任が重くなると答えたものも多かった。

69. 滑液包炎に対するエタノール注入療法

坂田早苗, 大宮安紀彦, 神戸正博
大野 完, 湯村 和博, 和田 了
島尻郁夫, 石塚 毅彦, 西山 裕
池田康紀 (宇都宮記念病院)

エタノール注入療法は、大藤らの肝のう胞や肝癌への有効性にヒントを得て、難治性の滑液包炎に行い、満足すべき成果を得た。その方法は、ペンタゾシン基礎麻酔15分後に滑液包を穿刺し内容を除去、そして2%キシロカイン液を同量注入し滑液包内を麻酔する。15分後麻酔の得られた頃、キシロカイン液を除去し、次いで無水エタノールを注入、15分後エタノールを除去し、萎んだ皮膚より手でマッサージする。術後2~3回穿刺する。